

中学生がいる家族の個別化と凝集性

—情報機器の個別所有と活用状況との関連で—

○長津美代子 笠原牧美 田井春美 (群馬大)

研究目的 高度情報化社会が進展する中で、さまざまな情報機器が家庭の中に浸透している。こうした機器は多様な情報の入手やコミュニケーションの手段としては便利ではあるが、個人専用でそれを所有・活用するようになると、家族関係を分断する契機にもなりかねない。本研究では、中学生を対象に、次の諸点を明らかにすることを目的とする。

1)テレビ、電話、パソコン、ポケベルなどの情報機器 11 項目の子ども部屋における所有状況と活用状況。2)その所有・活用状況は家族や親子関係にどのような影響を与えているのか。家族への影響は「個別化意識」と「家族一緒の外出」、親子関係については「親との会話時間」、「理解」や「達成後反応」などでとらえた。

研究方法 調査は群馬県の公立中学校の 1~3 年生の男女を対象に、1998 年 9~10 月に質問紙法で行った。分析対象者は記述が不十分なケースを除く 330 名である。家族構成は核家族 57.9%、拡大家族 41.2%である。母親の 78.6%が働いている。

研究結果 1)平均 3.9 台の情報機器を所有していた。上位 5 つは、CD ラジカセ・コンポ (86.7%)、ヘッドホンステレオ (53%)、テレビ (51.5%)、テレビゲーム機 (44.8%)、携帯用テレビゲーム (41.5%)であった。パソコンの所有者は 10.6%、ポケットベルは 9.1%、PHS・携帯電話は 6.7%であった。2)子ども部屋での利用時間は、所有率上位 5 つの中では、テレビがもっとも長かった。3)機器の所有個数が多いほど親から理解されていないと認知している者が多く、また子ども部屋でのテレビ視聴の時間が 4 時間以上と長くなると個別化意識が高く、母親の達成後反応も否定的であった。